

「城南小松菜」の在圃性

宮澤直樹・馬場 隆
(江戸川分場)

【要 約】「城南小松菜」は現行のF₁品種である「いなむら」と比べると、収穫適期幅が施設で0.24～0.35倍、露地で0.16～0.23倍短い。そのため、高温期は1日、それ以外の時期では2日程度で収穫できる量を播き分けて栽培することが望ましい。

【目 的】

昨年度の試験で、「城南小松菜」がF₁品種である「いなむら」と比べて、伸長性が高いことがわかった。コマツナは収穫適期を逃すと、大株となり販売に適さなくなる。したがって、本年度は「城南小松菜」の在圃性を明らかにする。

【方 法】

試験品種として「城南小松菜（以下城南）」、対照品種「いなむら、ごせき晩生小松菜（以下ごせき）」を供試し、4月中旬（春作）、5月中旬（夏作）、10月上旬（秋作）に、パイプハウスまたは露地に条間14cm、株間6cmで播種した。施肥はN-P₂O₅-K₂Oを全量基肥で、施設では各7kg/10a、露地では各12kg/10a施用した。草丈10cmを超えてから、地際からの草丈を1反復10株で2反復、定期的に調査し、同一株の草丈推移を記録した。

【成果の概要】

1. 図1に草丈の推移と灌水量（施設）または降水量（露地）を示した。施設では草丈調査開始直前に灌水を実施した。施設について草丈の推移をみると、いずれの作型においても「ごせき」に比べて「城南」が、生育が進むについて伸長が若干進んでいた。「いなむら」は、いずれの作型でも「城南、ごせき」に比べてゆっくり伸長していた。また、露地について、いずれの作型でも適度に降雨があり、圃場が乾燥することはなかった。そうした中で、草丈の推移は施設と同様の傾向がみられた。
2. 図2では、図に示す通り草丈で期間を3つに分け、期間別1日あたり伸長量を示した。いずれの作型、品種においても草丈が小さい期間の方が1日あたりの伸長量が高い傾向だった。「城南、ごせき」は、いずれの期間においても夏作が他の作型に比べて伸長量が大幅に高かった。そして、いずれの生育期間においても施設より露地で伸長量が高かった。一方「いなむら」は、夏作や露地で伸長量が高まる傾向はなかった。
3. 品種間の在圃性の差を明確にするために、収穫適期を25～30cmの5cmとした場合に、期間②のデータから推定される収穫適期幅を図3に示した。その結果、「城南」は施設では春作で3.6日、夏作で1.9日、秋作で4.1日、露地では春作で2.4日、夏作で1.5日、秋作で2.3日となった。この結果は、いずれの作型でも「ごせき」に比べて若干適期幅が短かった。また「いなむら」と比べると、施設で0.24～0.35倍、露地で0.16～0.23倍収穫適期幅が短かった。

【残された課題・成果の活用・留意点】

施設栽培では、収穫期に圃場を乾かすよう灌水を実施する必要がある。

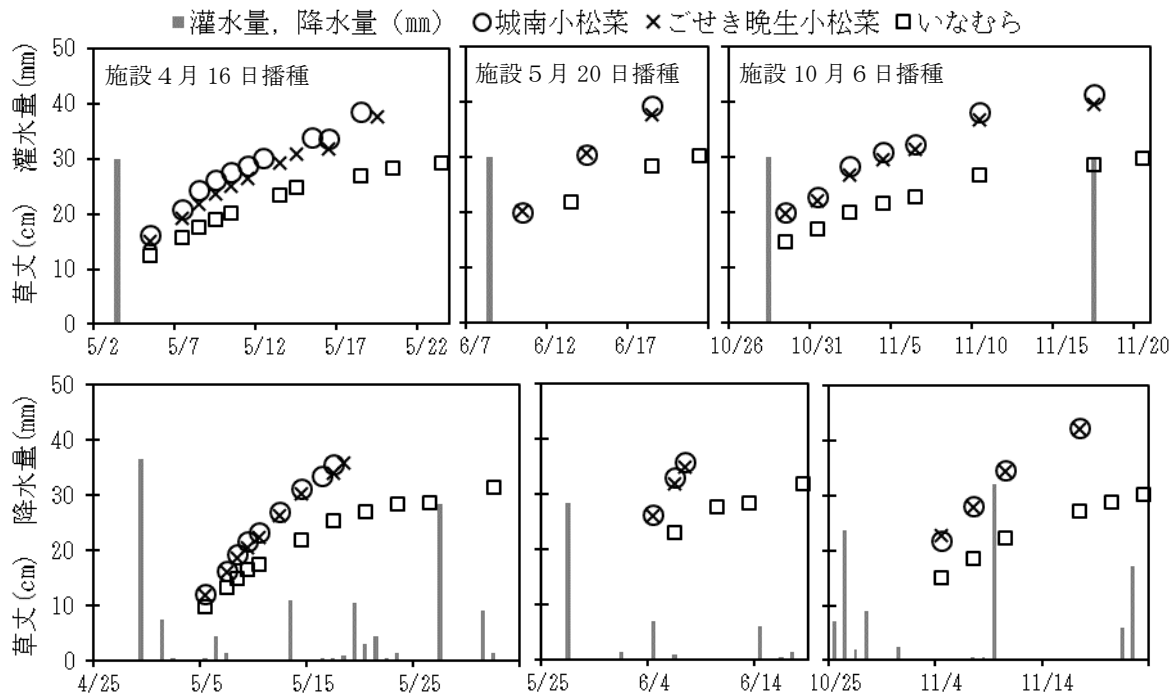


図1 施設（上段），露地（下段）における草丈の推移および灌水量，降水量
注）「いなむら」のみ草丈 30cm 程度までの測定とした。

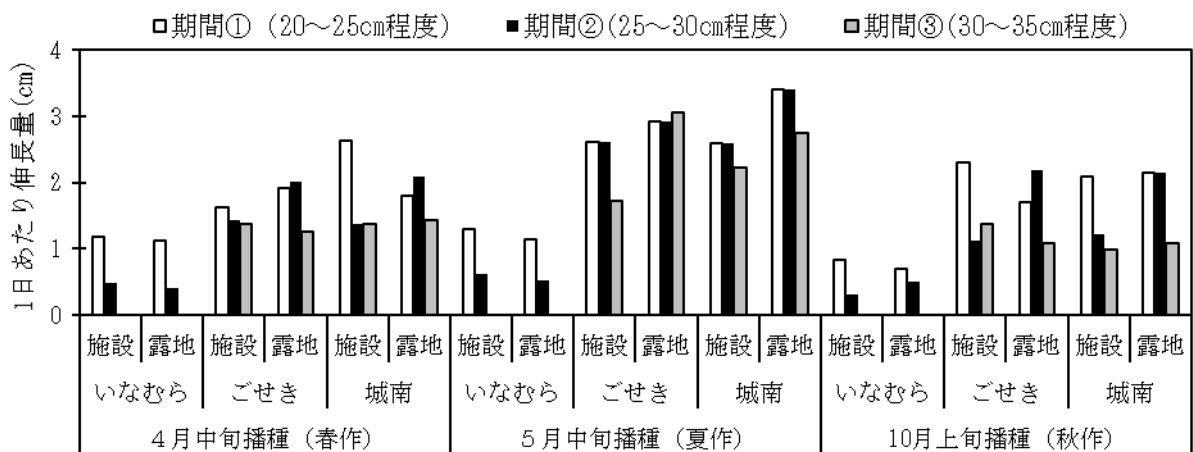


図2 期間別，1日あたりの伸長量 (cm)

注)夏作の「ごせき」「城南」では，期間②，③はいずれも 20cm 程度から 30cm 程度までの伸長量を日数で除して算出しているため，同じ値である。

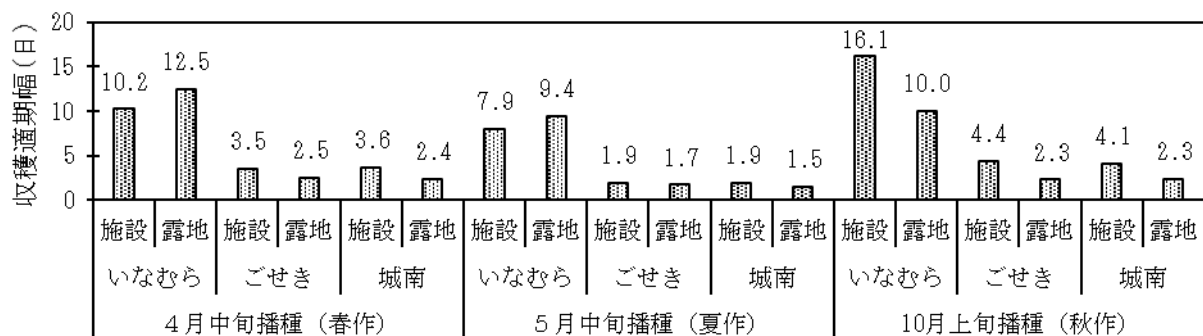


図3 収穫適期を 25~30cm の 5cm とした場合の推定される収穫適期幅 (日)

注)期間②のデータから，収穫適期幅を算出した。